甲子園通算33勝の名将・深谷さん　樹齢53年

日進の木・キンモクセイ物語

初夏の爽やかな風が頬をなでる5月末、高松池に程近い藤塚の緩やかな高台を歩くとその木はあった。

自宅を建てた昭和38年当時、民家はまだ数える程しかなく、小高い山と野原が広がっていた。「ここは夏でもちょうどいい風が通り抜けてくれる場所なので気に入っているんです」

この家に住み始めて53年になる深谷弘次さん（89）と、雅江さん（81）夫婦が出迎えてくれた。

道路側に3㍍程の高さのキンモクセイと、自生したマツの木が並んで育つ。深谷家のキンモクセイの歴史は、一味違う。弘次さんの恩師で中京大学の開学者、故・梅村清明名誉総長・名誉理事長から新築祝いとして贈られた記念樹だ。「理事長が『木を植えてあげよう』とわざわざ言ってくださった。他にもサツキやツツジ、ツバキをいただき大事に育てている」と話す。

それもそのはずで、弘次さんは甲子園で活躍した元中京商高（現中京大中京高）野球部監督だ。戦後大学に通い始め、学費を稼ぐために饅頭屋や鉄道の小口貨物輸送の仕事をしながら学業と野球に打ち込んでいた。ひなむきな姿勢が梅村氏の目に留まり、3年生の頃、「高校の教員になって監督をやってくれ」と熱望された。「大学を途中で止めるわけにもいかないし、人前に出ることが大の苦手」とあって一度は断ったが、4年生最後の1953年3月に決心し、その職を引き受けた。当時部長だった故・滝正男氏と共に甲子園では54年夏、56年春、59年春を制するなど采配を振るい、中京商黄金時代を築いた。中京商の他にも三重で監督を務め、甲子園では通算33勝を誇る屈指の名将として名を馳せる。

「勝つことが当たり前。なので試合で負けて謝るときのあいさつはつらかった。『（監督を）早くやめろ』と言うもう一人の自分がいた」と苦笑いする。「自分の使命はすべての教え子を進学、就職させること。たとい控え選手でも『何番を打ってどこを守っていた』という経験が自信になる。なので練習試合では全員を出した」と振り返る。元中日ドラゴンズの正捕手・木俣達彦氏をはじめ、多くのプロ野球選手も輩出した。

退職後の目標は「書籍1千冊読破」。考古学や政治、経済などの本を図書館で借りては読み、2年前に達成した。以降、好きな小説を主に読みあさり、ノートに刻んだ記録は5月末で1236冊を数えた。

夫婦は結婚して今年58年を迎える。キンモクセイは二人の生活の原点でもあり、弘次さんは良き伴侶への感謝も忘れない。「現役時代は家のことは妻に任せっきりでした。今はもちろん家庭が第一。電球の取り替えはいまだにうまくできませんが（笑）」。

一方の雅江さんは「主人は外で働く人。私は家庭を守る一心でした。退職後は息子や孫たちとゴルフをしたり、北海道旅行に出掛けたりする楽しみもできました」と笑顔を見せる。

今年も夏の甲子園が始まる。弘次さんは自家用車を運転して県内の球場を巡り、テレビの野球解説者として登場する。そのために、毎日の発声・滑舌練習は欠かさない。「来年は卒寿で免許更新の年。夫婦で上手に生きながらえたい。今年も『熱い夏』になりそうだね」。（広）

⬆キンモクセイに優しい眼差しを送り続ける深谷さん夫婦